

「メキシコの征服者コルテス像の再考

ー歴史学の観点からー

日時：2021年3月27日（土）13:00—15:45

参加方法：Zoomによるオンライン形式

<講座の主旨>

エルナン・コルテス（1485-1547）は、メキシコの征服者として歴史にその名を刻んでいる。コルテスは1519年2月にキューバ島を出港し、メキシコはユカタン半島沖のコスメル島で約1ヶ月過ごした後、海岸沿いに半島を回り込んでベラクルスに上陸し、進軍を続けた。途中、先住民族を攻略したり味方につけたりしながら、1521年8月にアステカ帝国を陥落させた。それゆえ、コルテスは先住民社会の破壊者としてのイメージが先行しがちである。

しかし、メキシコを代表する知識人は、もっと冷静にコルテスを評している。オクタビオ・パス（1950）は、コルテスは「自分の考えと責任で、主君の意に反して、だが国王の名の下で、国王の利益のために戦った」と、その矛盾を抱えた当時のスペインを反映した人物と見た。カルロス・フエンテス（1992）は、「キリスト教徒の兵士としてのスペイン人の義務と、彼を神とみなすインディオの誤解とのほざまで、コルテスはずいぶん前者を選ばざるをえなかった」とコルテスの内面に踏み込んで解説している。また、多くの歴史家がコルテスの評伝を発表している。スペインのマダリアガ（1941）はコルテスが新大陸を文明化に導いたとし、イギリスの歴史家ヒュー・トーマス（1994）やフランスのベナサール（2001）は混血国家を築いたとしてその役割を評価している。また、メキシコのミラリエス（2001）はコルテスを中世の騎士道精神にあこがれを持って征服活動を展開した人物と見る一方、ベナサール（2001）は「常にマキアベリが描いた君主のようであった」とルネサンスの息吹を感じさせる人物、メキシコのマルティネス（1990）はコルテスの冒険心や行動力がルネサンス的であると評している。このように、コルテス像をめぐるには、実に様々な解釈が存在する。

2021年はコルテスによるメキシコ征服500年の節目の年にあたる。スペインでもコルテスに注がれる眼差しに変化が見られ、2014年にマドリードではカナル財団による「コルテスの征服の道」を辿り、メキシコ上陸にまつわる400点の展示が行われ、コルテス書簡のみでは伺い知れない当時の様子を再現し、注目を集めた。一方、バリエドリード大学教授マリア・デル・カルメン・マルティネス・マルティネスがコルテスの両親との関係や子孫の歴史を紐解き、征服者の血縁関係からその内面に迫る研究を継続的に発表し、またエストレマドゥーラ大学ロサ・ペラレス・ピケレス教授が率いる研究チームは、コルテスの都市建設や教会建設の事例を集めて、建築を中心とした文化的貢献を問うプロジェクトを進めている。

そこで今回の講座では、日本国内の研究者や翻訳者とともに、それぞれの視点から、これまでのコルテス像を整理し、捉え直す機会としたい。全体討論では、それぞれの登壇者から、捉え直す際に必要となってくる歴史的視点や資料などについて意見や情報を提示いただき、コルテスの実像に迫りたい。

プログラム

13:00 開会の辞

13:05

『コルテス報告書簡』（カルロス一世国王宛て）を全訳して」

伊藤昌輝（ラテンアメリカ協会顧問）

スペイン国王カルロス一世に送られたコルテスの「報告書簡」は、生々しい現場からの報告であり、それは征服者の視点から書かれたもっとも重要な一次資料と言えよう。ごく少数の冒険家を率いてあの好戦的なアステカ民族とその壮大な帝国に立ち向かい、これを征服した。どうしてそれが可能であったのか。また、ヨーロッパと「新世界」の真の意味での最初の文化的衝突の実態等につき、同報告書簡の訳者としての印象を述べたい。

13:25

「マヤ系先住民通辞と征服-コルテスの『情報戦略』の系譜-」

大越 翼（京都外国語大学教授 ラテンアメリカ研究所所長）

スペインによる新大陸経営は、当初より言語や文化の異なる先住民をどの様に植民地体制に組み入れるかが最大の課題であった。高度な文明を持った先住民社会が存在することが知れた1517年以降、遠征隊を率いるスペイン人はこれを強く意識していた。1517年、フランシスコ・エルナンデス・デ・コルドバはユカタン半島北東部でマヤ先住民を2人捕らえてキューバに連れ帰る。スペイン語を解するようになった2人を通じて大陸の先住民社会に関する情報を得たグリハルバは、翌年の遠征に彼らを同道し、遭遇したマヤ人たちとのコミュニケーションに使っている。さらに翌々年にはコルテスも彼らを連れて行き、1511年にユカタン半島東岸沖で難破し、漂着してマヤ王国の奴隷として生き延びていたスペイン人ヘロニモ・デ・アギラルを迎え入れる際に、重要な役割を果たした。タバスコ地方で得たマリツィンという名の先住民女性とアギラルがアステカ王国征服に果たした役割は、有名である。スペインによる新大陸の征服・植民地経営には、先住民通辞が果たした役割が極めて大きく、彼らを使った巧みな「情報戦略」があったことは疑いない。ここでは、コルドバ、グリハルバ、コルテスらがどの様に未知の社会と対峙しようとしていたのかを、通辞をキーワードとして読み解きたい。

13:45

「先住民貴族とコルテス-トラスカラとテスココの記録文書から-」

井上幸孝（専修大学教授）

本報告では、16世紀後半～17世紀前半の先住民貴族の子孫が書き記した歴史文書に見るコルテス像ならびにスペイン人征服者に関わる描写について考察する。具体的には、トラスカラに関するムニョス・カマルゴの『トラスカラ史』、テスココに関するアルバ・イシュトリルショチトルの『テスココ王国史概要』および『チチメカ人の歴史（ヌエバ・エスパーニャ史）』の記述を検討し、テノチティラン（メシーカ人）だけではない多様な先住民世界から見たコルテスおよび征服に対する先住民側の見方について考えてみたい。

14 : 05

「コルテスのアジア貿易への関心」

立岩礼子（京都外国語大学教授 ラテンアメリカ研究所研究員）

メキシコの歴史家レオン・ポルティエリャは、コルテスが大西洋から太平洋に抜けてアジアへの道を模索していたと考えた。確かに、コルテスは総督の地位を追われてから、太平洋岸の探検を繰り返している。オアハカの海岸で造船を試み、ペルーのピサロに援助を送り、フィリピン諸島の1つであるセブの王へ書簡を書いている。植民地各地の情報のみならず、スペイン本国の動きも把握し、太平洋貿易の先駆けとしてアジアに大いなる関心を寄せていたと推測される。本報告では、コルテスのアジアへの眼差しを追ってみたい。

14 : 25

「最後の中世人か、近代の先駆者か—エルナン・コルテスの世界史的位相—」

安村直己（青山学院大学教授）

コロンブスと同様に、コルテスには中世の産物としての側面と、近代の先駆けという側面とが共存していたかのように思われる。彼は、キューバ総督のベラスケスにいわば傭兵隊長として選ばれ、大陸部への遠征隊を任される。これは、ルネサンス期イタリアで生まれた軍事組織の新世界版といえよう。いざ、大陸部に上陸し、西方の高原地帯に豊かな王国が存在することを知ると、カスティーリャ中世の政治的伝統にのっとり都市を創設したうえで、その参事会により市長に選出されることでベラスケスとの契約を無効にし、雇い主による遠征隊を征服のための自前の部隊へと変貌させる。

他方で、「悲しき夜」における決死の逃亡後、スペイン人部隊とトラスカラを中心とする先住民補助部隊を再編し、テノチティラン攻略に臨んだ際の戦いぶりは、情報収集・伝達、運輸面での技術的優位、卓越した外交手腕、反撃の可能性を抑え込むための徹底した破壊の組み合わせにおいて、後の欧米諸国（日本も例外ではない）による植民地戦争を予感させる。

この両面をどう理解すべきかを、みなさんといっしょに考えていきたい。

14 : 45

「メキシコナショナリズムにおけるコルテスの位置づけ」

山崎眞次（早稲田大学名誉教授）

メキシコではスペイン的なものは否定される。アステカ王朝を葬り去ったコルテスに対する風当たりは強い。メキシコ革命によって打ち立てられた民族主義が大きく影響しているからである。革命政権が打ち出した先住民・メスティーソ主義が支配的な状況下、1946年にコルテスの遺骨が発見され、国中にセンセーションを巻き起こした。この出来事をメキシコナショナリズムの観点から考える。

休憩（10分）

15:15 質疑応答を含む全体討論（司会：立岩／大越）

15:45 閉会の辞